

# R6 (2024) 年 共通テスト追試 『激書』

次の文章は、明代末期から清代初期の思想家である賀貽孫がいそんが著したものである。

とくおうハ ム ヨ

秃翁好レ大者也。

秃翁は、雄大であることを好む者であった。

ノニ ハク

ス

ニ

其言曰、「余家二泉海一。

彼の言葉にあることには、「私は福建省泉州の海辺に暮らしていた。

ルニ ニ

キテ

ざル あたハ

サルコトなり

海魚入レ港、潮退而ア不レ能レ去也。

(とある) 海魚が入り江に入ったところ、潮が引いて離れることができなかった。

メ

ヨ

チ

ふきんヲ

のほりテ

はしづヨリ

ニ

集二数百人一、持二斧斤一升レ梯 登二魚背一、

数百人を集め、おのを持って、はしごでのぼって魚の背にのぼり、

しやくかつシテ ヌルモ

斫割 連 二数百石一、魚故 無レ害 。

もとヨリ シ そこなハルル

切り取って数百石も列をなしても、魚は依然として、損害が無い(様子だ)。

しゆめニシテ

レバ

シ

ヨラシ

ヨ

ゆうぜんトシテ

ゆケリ

須臾 潮至、翻レ身揺レ尾、悠然 而逝 。

しばらくして、潮が満ちてきて(魚の場所まで) 到達すると、身をひるがえして

尾を揺らし、ゆったりと落ち着いた様子で(非超然として意に介さず) 去った。

おもヘラク

ナル

なシ

すギタルハ これヨリ

以為 魚之大者イ莫レ過レ此 矣。

思うに、魚で大きいものは、これ以上のものはない。

モまタゴトキ

ノノ

のみト

A 豪傑之士亦若 二是魚一而已矣。」

豪傑の士も同様に、この魚のよう(に雄大)であるだけだ」と。

嗟乎、秃翁則誠豪傑也。

ああ、秃翁こそ、本当に豪傑である。

然徒知一豪傑之能為一大、

しかし、ただ豪傑が雄大でいられることを理解しているだけで、

而不レ知一聖賢之能不一為一大也。

優れた徳をそなえた人物が雄大以外にもなれることを知らないのだ。

B 不レ觀一之竜一乎。

このこと（一雄大以外になれる、聖賢のあり方）は、竜のあり方に見てないだろうか、いや、見てとれるではないか。

及一其化一也、時為一人焉、時為一虫焉、

それ（一竜）が変化する対象は、時には人間になり、時には虫になり、

時飄 為一葉焉、時擲 為一梭焉。

時には（ゆらゆらと）漂う葉っぱとなり、

時には投げ撃たれ（素早く動く）機織りの道具となる。

I 彼自有下所一以為一一大為一一小、為一一卷為一舒者上、

彼（一竜）が自在に大きくなったり小さくなったり、とぐろを巻いたり解いたり（様々に変化）するのは理由があるのに、

而一一人乃以一区区小大之形、瑣瑣卷舒之状一求一之。

平凡な人々は、なんて小さくて取るに足らない大小の形や、些末な、巻いてわだかまっていたり、解いて体をのばしたりの状態でこれ（一人物判断）を追究する。

C 是豈知 二竜之為 一竜哉。

これはどうして竜の竜たるゆえん（≠理由）を理解しているだろうか、いや理解していないはずだ。

こしん そのほつス たらんト

禿翁惟其欲レ為 二泉海之魚 一。

禿翁は泉海（≠福建省泉州）の大魚（のように雄大）になろうと望んだ。

こしんもつてふレテ わざはこしん ず やすカラ

ウ 是以 攬レ禍 而不レ寧 。

これが原因で、禍（≠思つに任せない状況）に陥って、（人々から攻撃され、）安寧しない（で獄死した）。

しんメバ マシテ シテ ラ ラ

D 使 二禿翁 不レ為レ魚而為レ竜、

（仮に）禿翁が大魚（のように単に雄大）ではなく、竜（のように一定したあり方にとらわれない自在な境地）であったならば、

しんメバ マシテ わざはこしん 二ぎ

世人安 得而禍 レ之也哉。

世の人々は どうして（彼に）危害を加えることができたろうか、いや、できなかったはずだ。